

陝北の旅・報告そのⅢ 橋 詰 滋

★4日目（9月26日）の続き

（前回までのあらすじ）

この日は、乾坤湾→清水湾を経て、文安驛に行く予定でしたが、時間的に少し余裕がありましたので、習近平国家主席が文化大革命の折に下放されていた梁家河村に立ち寄ることになりました。

我々は、遊園地の絶叫マシンよりも絶叫を体感できるバスに揺られ、5分程で梁家河村に到着しました。近くに商店がありましたので、そこで地元産のお酒などの商品を物色し、今晚のお酒は何にしようかなと呑気に考えていました。

★そのとき、思いがけないトラブル！！

1台のパトカーが商店の前に止まり、警察官がぞくぞくと降りてきて、我々の方に向かってきま

した。警察官の一人が黄氏と会話した後、我々に一緒に交番まで来るよう指示しました。

我々は、バスに乗せられ、パトカーの先導のもと、交番に連行(?)させられました。誰かが「今日の宿は留置所ではないのかな?」と言っていたのを覚えています。中国の留置所がどうなっているのか興味がありますが、やはり泊まりたくはありません。

交番に到着後、交番の奥にある警察官の仮眠所に押し込められ、しばし待たされました。

警察官と黄氏との交渉が続いた後、警察官からパスポートを提出させられ、梁家河村へ入場するための手続きをさせられた後、我々は解放されました。この間、時間では30分くらいだったと思いますが、2時間くらいに感じました。

結局、我々が何故交番に連れてこられたのかについて不明ですが、ある人曰く「黄さんが専用バスの運転手に速すぎると注意したから、運転手が警察官に怪しい外国人がいると告げ口をしたからじゃないのか」。

最後に、警察官に記念撮影をお願いしましたが、もちろんNGだったため、我々を先導したパトカーの写真を掲載します。

我々は解放された後、習近平が下放時代に過ごしたヤオトンを見学しました。習近平のヤオトンは当時のまま残されていて、彼がこんなに粗末な暮らしをして、そこから立志出世したということが強調されているようでした。中国国内の共産党や政府関係機関、企業の社会科見学の場となっているようであり、見学者は非常に多かったが、やはり外国人は我々だけでありました。

見学後、専用バスに乗り、梁家河村の入口まで戻りました。帰りのバスは行きほど飛ばしていませんでしたが、バスの運転手は、同僚の女性と私



パトカーと榎野氏



習近平のヤオトンの内部



文安驛の門の前で記念撮影

語をしながら運転をし、安全運転とはほど遠いものでした。

再び、趙氏が運転する安全なバスに乗り換え、文安驛に5分くらいで到着し、この日の宿にチェックインしました。宿はヤオトンを利用したものでありますが、内装は非常にきれいであり、シャワー、水洗トイレ、テレビ、Wi-Fiなどの近代的な設備が完備され、快適に過ごすことが可能であります。ただ、この日の宿では、楨野氏・浪花氏の部屋で、部屋のドアが完全に閉まらないというトラブルに見舞われました。毎回、何らかのトラブルが発生することにも、だんだん慣れてきました。

宿に到着後、黄氏が忙しそうに、宿のスタッフと何らかのやり取りをしていたことが印象に残っています。この時は、黄氏の行動が次の日に起こるサプライズにつながることに思いませんでした。

文安驛の町を散策した後、文安驛のヤオトン改装したレストランにて夕食を取り、この日の行程は終了しました。

結局、この日も天気が悪く、名月を眺めることはできなかったことは残念であります。

★5日目（9月27日）

私は6時頃に起床し、宿の敷地を散策しました。宿は、3穴のヤオトンで1組の長屋を構成し、宿の敷地内に20組くらいの長屋があり、一つの集落みたいになっていました。宿内を30分くらい



樊さんの作品

かけて散策し、朝靄に包まれたヤオトンの集落はとても幻想的でありました。

7時に朝食を取りましたが、ここでも、飲み物がなく、申し訳ない程度にお粥があるのみでした。やはり、この地域の方は朝食のときには、飲み物を飲まないのだろうと、勝手に思い込むことにしました。

我々は8時半に宿をチェックアウトしました。この日の最初の目的地は高鳳蓮芸術館であります。ここは、この「わんりい」にも度々記載があります。高鳳蓮さんの剪紙を展示した美術館であります。高鳳蓮さんに関する説明については、「わんりい」に掲載された過去の有為楠さん等の記事にお譲りしたいと思います。（「黄土高原に咲く目にも彩なる花々・剪紙」で検索可）

高鳳蓮芸術館に行くときになって、前日に黄氏が、忙しそうに宿のスタッフの方とやりとりをしていた理由が判明しました。宿より地元の延川県の役場を通じて高鳳蓮さんの娘さんに連絡をとって、娘さんの劉潔琮氏とその旦那さんが10キロ先の延川県より早朝にも拘らず、宿まで御足労いただくことになっておりました。これには、皆さん驚くあまりで、何と云ってよいのか、ただ感謝をするのみでありました。

我々一行は劉夫妻ともに、高鳳蓮芸術館へ向かいました。道中、舗装されているが大変険しい山道を走り、15分くらいで到着しました。なんと、一昔前までは、舗装された道でなく、獣道みたいなところを徒歩のみで登っていたようであります。



芸術館の前で記念撮影

芸術館は高鳳蓮さんのヤオトンの自宅を改装し、1室では高鳳蓮さんの過去の国内外で受賞した華麗な経歴が掲示してあり、他の3室では高鳳蓮さん、娘の劉洁琼さんそして、外孫の樊蓉蓉さんの作品が展示してありました。作品は非常に繊細であり、ひとつでもハサミの入れ方を間違えたら、全てが水の泡となるようなものであり、このような作業ができることに恐れ入りました。これらの作品を柳田夫人がとても真剣な眼差しで鑑賞していたことは印象に残っています。

私は芸術に無頓着であるため、作品の素晴らしさをうまく表現できないため、有為楠さんの過去の記事を参考にしたいと思います。

劉さん曰く。「女性は大人になったら、自分で剪紙ができ、それは犬が成長したら噛むことができるように」とのこと。この地域の女性にとっては、剪紙は生活の一部であるということですね。

高さん、劉さん、樊さんと時間が進むに連れて、作品の題材も現代的になりつつある感じがしました。特に、樊さんの作品では、男女の恋愛を表現したものもあり、今の若者からも受けそうな作品であります。

数多くの作品を堪能したあと、我々は劉夫妻をご自宅に送るため、共に延川県に向かいました。途中、延川県が生んだ著名な作家である路遥の旧居があると聞いたため、少し予定を変更し訪問しようと思いました。旧居の入口にて、管理人から入場料が1人30元であり、チケットの購入場所が旧居の入口から300m位離れた場所にあることを



文安驛の門の前で記念撮影

聞き、時間の都合上、訪問を諦めました。

延川県にて、我々は劉夫妻と昼食を取ったのち、お別れとなりました。聞くところによれば、夫妻はご多忙のなかボランティアで御足労いただき、高鳳蓮芸術館の入場料も無料だったらしい。本当に感謝します。

劉夫妻と別れたあと、我々は一路西安に向けて、6時間に渡る長旅に出発しました。途中、2回の休憩をはさみ、18時半すぎに西安に到着しました。我々はホテル内のレストランで食事を取った後、私は楨野氏・浪花氏とで街に散策に出ました。

西安の街では非常に多くの外国人観光客(中国人以外)を目にしました。9月22日に西安空港到着後、4日間我々以外の外国人に出会ったことがなく、我々は本当に誰も行かない中国の秘境の地に行っていたことに気づかされました。これも、普通の旅行会社が行うツアーでは体験できない醍醐味であります。

西安の街はまさに不夜城であり、至る所がライトアップされていました。中心部にある鐘楼は時間が遅かった(20時ごろ閉館)ため、入場することはできず、外から眺めるだけで終わったことが残念です。我々は1時間ばかりの散策を終え、宿に戻り、明日の兵馬俑見学に備えて、休みました。今回掲載の写真も全て浪花氏からのご提供によるものであります。ありがとうございました。

(続く)